

死んだと思いきやご本人に提案されたので、憧れのウルトラマンに  
なってみようと思います。

たかきやや

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

作者の気分展開小説第二弾！

防振り×ウルトラマンZ

## 目次

憧れと可能性	1
割りと早く見つけた!でも……………あれ?	4
タイトル詐欺は嫌なので、回収したいと思います	10
それぞれへの影響	17
注文!新装備!	21
第一回イベント／ファイト・of・唱人	27
第一回イベント／御唱和下さい、我の名を!	34
結果と考察	40
盾の友達と絵描きの少年	46
そうだ、二層に行こう	50
3人で…………?	53
イベントは3人で	57
輪切りにしてやるぜ!(フラグ)	64
邂逅―赤い少女と赤い珍獣と赤いアイツ―	70
邂逅―昭和と令和と御唱和と―	75
赤いアイツらの決着	81
共闘の後で	87
運営、掲示板、ご本人	90

## 憧れと可能性

とある家の二階の一部屋。一人の少年が机に向かって何かを書いている。勉強？否。宿題なら既に済ましている。なら彼は何をしている？

「よし、できたー」

と声を上げ、〃スケッチブック〃を上げる少年。そこには町の風景と黒塗りの大きな影と真っ白な巨人の様な者が書いてあった。

彼の名は「御唱ごしょう 和人かずと」生粋きつすいのオタクで、ヒーローマニアだ。そして、彼の推しは昔、〃ゲームとして、販売されてた〃巨大格闘ゲーム【ウルトラ決闘歴史デュエルレガシー】シリーズの『ウルトラマン』達だ。

彼がまだ生まれる前に発売していたゲームで、同年代は知っている筈も無いが彼は祖父の影響でウルトラマン沼にハマっている。その知識量は深く、ウルトラナビとかやらせたら一話は取れる。

ちなみに、彼の一家はみんなゲームが大好きだ。父はゲームクリエイターで母はキャラデザイナーと割りど完璧に近い英才教育を受けてきました。

「和人ー！飯にするわよー」

「はーい」

母の呼び掛けに答え、和人は下に降りる。

「今日の〃飯はなーに？」

「拉麵ラーメンよー」

「おぉー旨そう」

「当たり前でしょ！○王なんだから」

「インスタントラーメンかい！」

と他愛の無い会話をしながらテレビに視線を向ける。

すると最近話題になっている『ニューワールド・オンライン』、通称『NWO』のコマーシャルが流れていた。

「最近のゲームって凄いわね。アレが全部映像なんですよ？」

「うん。明日買いに行く奴。楽しみだなー」

と話していると映像の中に見覚えのある影が見えた

「!？」

「どうしたの？」

母が何か不思議そうに問いかける

「今のCMに一瞬……………いた」

「居たって何が？」

「ウルトラマン……………」

その言葉に母が驚く

「ええ？… って事は……………居るのかしら？」

「ウルトラマンが？ニューワールドオンラインに？」

「出てきたなら居るんじゃない？作ってる会社は同じだし、あの制作会社って確か悪ふざけでぶっ壊れの武器とか能力があるし、ウルトラマンがいても可笑しく無いけど……………」

と母は推測を並べる。どれも的確で本当にありそうだ。あの会社は普通じゃ取れないスキルやレア装備などが沢山あって、発掘される度に修正が入るってのがワンセットみたいな所なのだから

「なれるといいわね『ウルトラマン』」

「そうだね……………」

—ヤバイ、明日が待ちきれない—早く来てほしい。そう思いながら和人は、晩御飯を食べた後、今日は早く寝た。

彼との出会いを夢見ながら

割りとは早く見つかった！でも……………あれ？

「ただいまー！」

「お帰り。お望みの物は買えた？」

「うん！これでやつと出来る」

「先に宿題済ませんのよ」

「学校の休み時間に終わらせた」

「やるわね。じゃ、先にご飯にするよ」

「はい」

と日常の会話をしながら晩御飯の手伝いをし、食べ終わった後、いよいよゲームスタートだ

和人がゲームを起動して目に入ったのは、青くて四角い物がつまれた不思議な電腦空間。そう、キャラメイクからだ

「さーて、まずは名前か……………『御唱 和人』だから、『唱人』でいいか」

適当である

「武器は片手剣。見た目は……………銀髪に銀目で行くか」

容姿はウルトラマン仕様である。人間だが

「ステは……………こんなもんかな？さあ、ゲームスタートだ！」  
雑に始まるのである。

ログインが完了し、目を開けた先には、活気溢れる城下町の広場であった。

「おおー！賑わってる賑わってる。さてとステータスは……………」

青い半透明のパネルを出し、ステータスを確認する

唱人

Lvl

HP 50/50

MP 20/20

【STR 20+15】

【VIT 2】

【AGI 20】

【DEX 20】

【INT 20】

装備

頭 【空欄】

体 【空欄】

右手 【初心者片手剣】

左手 【空欄】

足 【空欄】

靴 【空欄】

装飾品

【空欄】

【空欄】

【空欄】

スキル

なし

「よし。じゃあまずはスキルとポーションを買ってレベル上げに行く



か

と今後の方針を決めた後、スキルとポーションを購入し、森へ向かう

「ソイ！」

「キュ」

「ハッ！」

「キュ」

「よつとらせー！」

「キュキュー！」

先ほどから約五十分後、モンスターを倒してレベルやスキルを獲得して現在はこうなった

唱人

Lv10

HP 60/60

MP 20/20

【STR 30+15】

【VIT 2】

【AGI 30】

【DEX 30】

【INT 30】

装備

頭 【空欄】

体 【空欄】

右手 【初心者片手剣】

左手 【空欄】

足 【空欄】

靴 【空欄】

装飾品

【空欄】

【空欄】

【空欄】

スキル

【HPドレイン】 【光魔法Ⅱ】 【回復魔法】 【剣の心得Ⅲ】 【魔法剣】 【天  
歩Ⅱ】 【縮地】 【遠見】

「よし、大分レベルが上がって来たな。じゃ、そろそろ本題のウルトラマン探しに入るか」

そう言っつて唱人は駆け出す

「CMだどこの辺りだけど……………」

唱人は自身の記憶を頼りにウルトラマンが居るであろう場所の辺りを散策する。すると突然！光弾が飛んで来た

「うわあー！何だ!？」

と回避から体勢を立て直し、相手を見るとそこには

ウルトラマンを彷彿とさせるような装甲服の様な物をを身に纏っていて、トゲを思わせる突起が多く手足が長い

その正体は――

「べ、ベムラー!?!じゃあCMの影の正体は……………」

俺がCMで見た憧れは偽物だと言う絶望に打ち付けられそうに

なったその時！光が落ちた。

「あ、アレは……………」

「ジュア」

それは憧れの存在だった

多少姿は違えど、例え等身サイズでも、そのマスクの様な顔に銀色の楕円形の目。胸に光るカラータイマー（形はZと変わった物だが、エックスやオーブの例があるため気にしない）。

その姿は、間違いなく。

「ウルトラ、マン……………」

ウルトラマン（仮）はベムラーと見合っすぐに交戦した

「いた……………ホントにいた!!ウルトラマンだ！ウルトラマン！ウルトラマン！ウルトラマン！ウルトラマン！ホントにいた!!小さいけどいた！」

と俺は興奮して声を上げた！子供の頃から夢見た憧れのヒーローに会えたんだ。そりゃあそうなるわ！

「ジュア！」

「あ、危ない！こっの！」

ウルトラマン（仮）が体勢を崩し、その隙にベムラーが光弾を打ち込もうとした所を、横から斬って止める。ベムラーの【HP】は僅かに減っていた。

「ジュア!？」

「よし！効いた！け、ど……………」

ベムラーはこちらを向き、大量の光弾をこちらに放つ

「ヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイ！」

俺は凄く距離を取って走って逃げるが

「うおおー！」

足元に飛んで来た光弾に驚いてつまずき、ゴロゴロと転がって岩に当たる

「いてて……『ヒール』っと。ん？アレは……」

【HP】が削られていたので、回復をしていると物影に落ちていた何かを手を取った。

「ウルトラマン達が描かれたメダルとこの機械……オーブやジードみたいに諸先輩の力を借りるタイプか。なら！」

俺はベムラーに押され、膝をついているウルトラマン（仮）の元へ寄って

「ウルトラマン！これを使え！」

「ジュア!？」

と言ってメダルと機械を手渡す。

「それはお前の物だろ！それがあれば勝てるんじゃないか!？」

「ジュア……」

「正直いつて俺じゃ勝てない！だから頼む！ウルトラマ……!!危ない！」

ウルトラマン（仮）に訴えてる時にベムラーが光線を放つ。それに気づいた俺はウルトラマン（仮）を庇う様に出る前に出て背を向ける

「ジュア!？」

「ぐううああああ！」

【HP】が0になるその時！ウルトラマン（仮）が光を放つ

「ジュア！」

光は俺を包み、辺りをを白く染める

タイトル詐欺は嫌なので、回収したいと思います

「…き……………人…………よ」

「ん、ん……………」

「起き……………い。人…子よ」

「んん、んあ……………」

「起きなさい。人の子よ」

「ここは……………つて！ウルトラマン!？」

俺は聴こえて来る声で目を覚ますと、そこには真っ暗な空間にウルトラマン（仮）が見下ろしていた

「ようやく起きましたか。人の子」

「え？あ？え？どういう状況？」

「私の名はウルトラマンZ。突然だが、君は死んだ」

「あ、はい」

ウルトラマン（仮）こと、ウルトラマンZは質問をストレートに返し、俺は高速で返事を返した。

「ついでに私もウルトラヤバイようだ」

「まあ、ベムラーだし。そりゃあウルトラヤバイですね」

ウルトラマンZのカラータイマーも鳴り始めているし、かなりヤバイと思う。

「それで提案だ。手を組まないか？私めもあなた様の力が必要なので  
ごぞいます」

うん。言いたい事は分かる。分かるけど……………

「言葉遣い変じゃない？」

「え？マジっすか……………この星の言葉はウルトラ難しいぜ……………」  
とウルトラマンZ……………長げえからZで。Zは戸惑う様に呟く、

「それと君たちで言う手を組むってのは、ウルトラマンになるって事で良いかな?」

「あ、ああ。その通りだ」

「なら異論は無い、頼む。力を貸してくれ」

その為に俺はここに来たんだ。

するとそれに応えるよううなずくとZの体が輝きだし、1つに集束すると、先程の機械の様なアイテムとなって俺の手に落ちる。

その名は「ウルトラゼットライザー」。

Zが呼び掛ける。

「先ず、ウルトラゼットライザーのトリガーを押します」

押すと、光が集まり、『Z』の文字を作った後、四角い入り口へと変わった。

「その中に入れ」

「おう!」

俺はその中へ走り込む。中は光が幾何学か何かを添って、通っていた。

その光の中から一枚のカードが現れる。カードにはゼットの横顔と、俺が描かれていた。

「これは?」

「ウルトラアクセスカードだ。それをゼットライザーにセットだ」  
「アイアイサー♪」

Zの言うとおりに、カードをセットすると

『ショウト ACCESS GRANTED』

と機械的な音声を発し、上の部分が光る。

「ショウトって言うのか。よし、ショウト。手を出してくれ」

俺はZの言う通りに手を出す。するとさっきのメダルが手のひらに落ちる

「ゼロ師匠、セブン師匠、レオ師匠のメダルだ。スリットにセットしちゃいなさい」

「なるほど。宇宙拳法の神技の力を借りるのか」

そう言いながら向きをちゃんと揃えてメダルをセットする。

「次にメダルをスキャンだ」

「ところでだけどさ、この作業ってこんなに長々とやってて良いの？」  
と質問しながらメダルを読み込む

『「ZERO」「SEVEN」「LEO」』

認証音が流れ、後ろからZが現れながら説明する

「安心しろ、ここの空間は時空が歪んでいるからここでの一分は外で一秒だ。さあ、最後に俺の名前を呼べ」

「トリガーは？大抵の変身物は最後にも押すけど？」

「押してくれ」

「オッケー。ドンと来い！」

最終確認を取って俺は構える。

「じゃあウルトラ気合い入れて行くぞー！」

「おうー！」

Zが腕を広げて胸を張り、両腕を左右に広げて叫ぶ。

「御唱和下さい、我の名を ウルトラマンZー！」

「ウルトラマン……ゼエエエエエエエツトー！」

と叫びながらゼットライザーを掲げ、トリガーを押す。

「へアアツ!!」

「デュワツ!!」

「イヤアア!!」

『ゼロ』『セブン』『レオ』三人のウルトラマンが光の線を描きながら飛び、一点に集約する。

---

ベムラーが光線を放ち終わり、手を下げる。すると、ソコには一人のウルトラマンが現れる。

ウルトラマンゼットをベースに

上半身に青と銀、下半身は赤と銀のカラーリング。胸と肩のアーマーはそのままだに腿にはプロテクター。

一番の違いは頭部にある。額には70親子と似たビームランプと頭頂に元からあるトサカの左右にゼロスラッガーの様な双刃。

それは宇宙拳法 師弟三代の力をその身に纏った戦士。

その名は

『ULTRAMANZ ALPHAEDEGE』

そう代わりに紹介するかののように、ゼットライザーから音声が行く

「待たせたな！第二ラウンドの始まりだ！」

<sup>俺</sup>Zは頭部にエネルギーを集め、エネルギー状の刃『ゼットスラッガー』を形成し、連結。ヌンチャクの様にし、「Z」型に構える

するとベムラーが光弾を放って来るが

「セイヤー！」

全て弾き、そのまま接近してヌンチャクを連続で叩きつける。金属音と火花が舞い、ベムラーに無数の傷がつく



するとベムラーは空中に飛び、Zはそれを逃がすかと言わんばかりに、エメリウム光線等に似た構えで額のビームランプから

「『ゼステイウムメーザー』!」

と言う光線を放ち、撃ち落とす。そして、また接近して、追い討ちをかけるように

「『アルファバーンキック』」

ウルトラマンレオの様な炎の回し蹴りを食らわせて壁に叩きつける。

——これが宇宙拳法、秘伝の神業か!?ウルトラ強え!!——

「ああ、やっぱあの三人は強え!ありがとうございます!」

Zは心の中ではしゃぐ。Zの口調はこれが本来の感じかもしれないな

「これで終わりだ——おっと!」

必殺技に入ろうとしたら、ベムラーが先程とは桁違いの量の光弾を放ち、Zは上空に避ける。

するとベムラーは上空に光線を放つがまるで分かってたかの様に

——否、このパターンはZがさつきベムラーにやってたヤツだわ

「自分で相手に使った手にかかるかよ!」

とツツこむとベムラーは巨大な光弾を作り出す

「今度こそ!」

Zは両手を胸の前で組み、各プロテクターが光る。そして、腕を斜めに伸ばし、光が「Z」の文字を形成。

そして右手を後ろ、左手を前に付き出して、十字型に組み、必殺の光線を放つ。

「『ゼステイウム光線』!!」

真つ直ぐと放たれる光線と光弾はちょうど真ん中でせめぎ合う

「おおおおおおおおおおおー!」

腕を押し出す様に前に屈むと光線の輝きが強くなり、光弾を貫きベムラーに命中し、貫かれる。

Z<sup>俺</sup>がベムラーに背を向ける様な形で地面に着地すると、背後でベムラーが爆発した。

その際、爆発に巻き込まれて小さく光る何かが散らばったのが見える。

後ろを振り向いて、ベムラーを倒したのを確認し、Z<sup>俺</sup>は「Z」の文字を描いて、飛んでいった……他から見たら、「N」に見えるが

「ショウト。さつき散らばったメダルを回収してくれ、お頼み申し上げます!」

「ん?じゃあこのまま俺と組むのかい?」

「ああ。お前が必要な時には力を貸してやる」

「サンキュー。じゃ、探しておくよ」

俺はZから元に戻ると、ちょうど足元に落ちていた二つのメダルを拾う

「エース兄さんとタロウ兄さんのメダルか」

メダルのウルトラマンを確認した後、アルファエッジのメダルと一

緒にイベントリーに仕舞う。今度メダルポーチとか作ろうかな？

そう考えながらメダルを探すが、見つからず、今日の所はログアウトし、また明日探す事にした。

---

とある森にて

「いったー!!」

と大声で叫びながら額を押さえる赤毛の少女——「ミィ」

「何なのよこれ!?!」

と空から飛んできて、自分の額に当たった“メダル”を手に取り、睨む。

「なにこれ?メダル?絵?どっから飛んできてのよ!」

と、文句を垂れながらもパネルを操作し、イベントリーに仕舞う。

「飛ばしてきた奴見つけたら絶対焼く!」

と、知らぬ間にロックオンされる唱人だった

## それぞれへの影響

【ヤバイの見つけた】

名無しの盾使い

マジでビビった

名無しの剣使い

スレ立て乙々

名無しの槍使い

どうした？

名無しの盾使い

人みたいなのが空を飛んで光線を放ってた

名無しの槍使い

フア!?

名無しの弓使い

フア!?

名無しの剣使い

フア!?

名無しの斧使い

フア!?

名無しの魔法使い

フア!?

名無しの槍使い

k w s k

名無しの盾使い

モンスターを狩っていたらいきなり強い衝撃が来て、見てみたら空  
飛んでた奴と地面から飛んできている光の弾と拮抗していた

名無しの弓使い

ええ……………(困惑)

名無しの剣使い

スクショは？

名無しの盾使い

飛んでる方のは撮れた

名無しの盾使い

【名無しの盾使いが写真を複数送信しました】

名無しの剣使い

ほんまや……………

名無しの弓使い

飛んでる、光線出てる

名無しの斧

そして、去るときに描かれた「N」……………ほんまに謎やな

名無しの魔法使い

所で名称はどうしますか？

名無しの盾使い

「N」でどうだろうか？飛び去る時にNって書いてるし。それとこれからもNの情報を集めて行くから何か分かったら報告頼む

名無しの槍使い

異義無し

名無しの弓使い

異義無し

名無しの剣使い

異義無し

名無しの斧使い

異義無し

名無しの魔法使い

異義無し

---

「ぎゃあー！ベムラーがやられたー！」

「ダニィ！アレがか!?あり得ねえ！アレは毒竜や他のボスよりもよりも強くしたはずだ！」

「そうだ！俺達の悪意の塊がー！」

「これを見る！」

すると、唱人が攻略する動画が映る

「ゼットライザー!?何であの土壇場であんなのを見つけたんだよ!しかも一回見て触れただけであそこまで分かるか!?!」

「オーブやジードって言って……まさか知ってるのか!?あの年代で!?!」

「もう20年前の代物だぞ!?そんな訳有るか!」

「なら何で分かっているんだよ!」

「そんなの知るか!」

もはや地獄と化していた運営陣だった

今日もログインし、唱人はふと思い出す

「そう言えばこれの確認まだしていなかったな」

唱人は人気の無い所でゼットライザーとメダルを取り出し、確認する

『ウルトラゼットライザー』

【STR+5 VIT+5 AGI+5 DEX+5 INT+5】

【破壊不可】

【ウルトラマンZ】

『ウルトラメダル』

歴代ウルトラマンの力を宿すアイテムで、三枚揃えて『ウルトラゼットライザー』でスキャンすることで、絵柄のウルトラマンの力を

借りる事が出来る。

現在所持メダル

『ゼロ』『セブン』『レオ』『エース』『タロウ』 計5枚

---

【ウルトラマンZ】

固有名称『ウルトラマンZ』に変身し、その能力を行使する事が出来る。

---

「なるほど分かった。でも………」

—やっぱ強く無い？だって、内包スキル見たら強いのが沢山。これもしかしたら修正どころが消されるかも知れない。まあ、何とかする方法はある。それは第一回イベントだ。ソコで入賞して、ウルトラマンの事を大々的に広めれば運営も利益上の理由で消さないかも知れない—

「よしーいくぞー！」

唱人はそう意気込んで、森へと向かって行った

## 注文！新装備！

アレから一週間。俺はメダルを探しながら素材と資金集めに没頭していた。理由は一つ。ゼットライザーが凄い目立つからだ。全身は初心者装備なのに、公式からもネットでも見たこと無いアイテムを装備していると、割と視線が集まる。ってな訳なので、装備を整えたと思います。ちなみにステはこんな感じ

唱人

Lv33

HP 1000/1000

MP 60/60

[STR 50+20]

[VIT 52+5]

[AGI 50+5]

[DEX 50+5]

[INT 50+5]

装備

頭 【空欄】

体 【空欄】

右手 【初心者片手剣】

左手 【ウルトラゼットライザー】

『ウルトラマンZ』

足 【空欄】

靴 【空欄】



装飾品

【空欄】

【空欄】

【空欄】

スキル

【HPドレイン】【爆弾食らい】【毒虫食らい】【光魔法Ⅳ】【回復魔法】  
【剣の心得Ⅳ】【魔法剣】【天歩Ⅴ】【縮地】【空力】【遠見】

---

見てて分かる。ゼットライザーの場違い感が凄かった。ってなわけで行ってみよー

---

「ここか」

と、俺は眩き。看板を見上げる。そこには『イズ工房』と書いてある。俺は扉を開けて一步入る。

「いらっしやーい」

入店すると、青い髪をゴーグルで押さえた女性がカウンター越しに作業していた。

「あら？はじめましてね、私はイズ。鍛冶を専門にしている生産職よ。貴方は？」

「俺は唱人って言います。本日は装備の相談で来ました」

「あら、礼儀正しいわね。で？装備の相談って？」

「実は武器以外の装備がまだ無くて。材料を持ち込みなら百万で作れ

ると聞きましたので、服と装飾品を一つお願いしたいんですが。あ、デザインも決まっています」

俺は素材と料金、デザインを書いた紙を取り出して手渡す。

「いいわよ。デザインも決まっているなら直ぐ出来るわ。後は素材とお金だけど……うん、足りるわね。ちよつと待っててね」

そう言っつてイズは仕事に取りかかる。待ってる間、俺はスキルの確認をしていると店の扉が開く。俺とイズがそちらに目を向けると、店に入ってきたのは某デスゲームに出てくるクラ○ンの様な男性と知ってる人が来たのだった

「いらつしやい……あら？どうしたのクロム？まだ盾のメンテには早いはずだけど？」

「ちよつと大盾の新入りを見つけてな。衝動的に連れてきた」

と、クロムと呼ばれる男の後ろには、黒髪黒目の初心者装備の明るそうな女の子がいた。

——どこかで見たとような気がするが、置いておこう——

「まあ、可愛い子ね……通報した方がいいかしら？」

「ロリコン死すべし慈悲は無い」

「待て待て待て！今のは言葉の綾だつて!!」

二人揃って青いパネルを空中に浮かべ、コールボタンに指を向ける  
唱人とイズに、クロムは焦ったように制止の声を上げる。

「分かってるわよ。冗談が通じないわね」

「すいません、本当にそうだと思つてました」

「全くもう心臓に悪い……つて、通報する気満々だったのかよ!?!」

「………テへ？」

「それで許されるかー!」

「はいはい、二人とも落ち着いて。その子もどうしていいのか困つて  
いるしね」

イズが仲裁し、話を本題に戻す。

「おつとそうだった。実は、この子が格好いい大盾が欲しいって言うから顔見せだけでもって連れてきたんだよ」

「なるほどね。私の名前はイズ。見ての通り生産職で、その中でも鍛冶を専門にしているわ。調合とかも出来るけどね」

「俺は唱人。さつき装備の注文をした人だ」

「あ、えつと私はメイプルって言います！」

「メイプルちゃんね。大盾を選んだのは何でかしら？」

「えつと…あの、痛いのは嫌だったので、防御力を上げようと思ったんです」

「んー…成る程成る程。じゃあVIT特化装備が良さそうね…でも……予算、ないでしょ」

「さ、三千ゴールドで足りませんか？」

「最低でも100万はある。高性能を求めるなら、素材と金も倍要るようになるしな」

「ひゃっ……ばっ……！」

メイプルは絶句した。

「うう……しばらくオシヤレはお預けだなあ」

分かりやすく肩を落とすメイプルに、イズさん達は慰めの言葉を送る。

「まあ、そんなに落ち込まなくても大丈夫よ。お金も素材も気付いた時に貯まっているものよ」

「急ぐならパーティーを組んでダンジョンに潜る手もあるぞ。ダンジョンにはお宝もあるし、お金を貯めるのにも盛ってこいだ。強力な装備も稀にあるしな？」

と話しているとメイプルが顔を上げて、俺の方を向いて目を焔かせて見つめてくる

「ど、どうした?」

「唱人くん! そのカッコいい武器はダンジョンで手に入れたんですか!? 装備は全部初期なのに!」

と、メイプルはゼットライザーを指差して質問する。「まあ、目立つもんな」と思いながらあやふやに説明した。

「これは『ウルトラゼットライザー』って言ってな。少し経緯や効果が複雑なんだけど、まあ、俺に取っては色々と思入れのある代物だ。で、これに合わせた装備を今頼んでいたんだよ」

「で、その装備が出来ましたー」

「え? ま?」

と振り向くと、カウンターには畳まれた服とその上に装飾品のホルダーが置かれていた。

「ありがとうございます」

「いえいえ、にしてもいいデザインね。凄く参考になったわ」

「絵は趣味で沢山書いてるので」

と話しながら受け取り、パネルを操作して着替える。

すると姿が一新。黒をベース白や赤の左右対象な模様と胸に水色で『Z』の文字が入ったノースリーブにダメージジャンバー。下は黒に同じく赤白の模様かついたズボン。そして、腰の近くにはウルトラマンZの胸のプロテクターを型どったホルダーがついている。

読者に分かる様に言えばウルトラマンZの主題歌担当の遠藤正明さんの衣装そのまんまだ

俺はそのまま装備の確認をする

---

Zモチーフのノンスリーブベストとジャンバー(革)

【STR+10 VIT+10】

---

Zモチーフのズボン(革)

【AGI+10 MP+10】

---

---

ゼットホルダー

【DEX+5】

---

「うん。デザイン通りだ。ありがとうございます」

「どういたしまして」

「うう、羨ましいよ」

物欲しそうに見ているメイプルに俺は苦笑いを浮かべ

「まあ、がんばれ」

と返してその後俺は、メイプルやイズさん、クロムさんとフレンド登録をし、メダルをホルダーに仕舞った後、森へと駆け出した。

## 第一回イベント／ファイト・of・唱人

アレから数日。イベントに向けてのレベリング等を重ね、遂にこの時がやって来た。

ステータスは少し上がり、メダルも少し集まったがフォームチェンジはまだ出来ない。ちなみに、現在の状況はこんな感じだ。

---

唱人

Lv45

HP 140／140

MP 70／70【+10】

【STR 65+30】

【VIT 65+15】

【AGI 65+15】

【DEX 63+10】

【INT 65+5】

装備

頭【空欄】

体【Zモチーフのノンスリーブベストとジャンパー（革）】

右手【初心者の手剣】

左手【ウルトラゼットライザー】

『ウルトラマンZ』

足【Zモチーフのズボン】

靴【空欄】

装飾品

【ゼットホルダー】

【空欄】

【空欄】

スキル

【HPドレイン】【爆弾食らい】【毒虫食らい】【成長補足】【剛腕】【光魔法V】【回復魔法】【剣の心得V】【魔法剣】【天歩VI】【縮地】【空力】【剛脚】【遠見】【MPカット小】【MP回復速度小】

現在所持メダル

『ゼロ』『セブン』『レオ』『エース』『タロウ』『アグル』『ネオス』『ジョーニアス』『ジャステイス』『ノア』『マックス』『ヒカリ』『ビクトリー』  
計13枚

ある程度は集まった。それなりには準備してきた。後はがんばるだけだ。

『ガオ〜！それでは、第一回イベント！バトルロワイヤルを開始するドラ〜！』

集まったプレイヤー達の頭上に現れた、マスコットキャラの「ドラゾウ」がイベント開始の合図を告げる。

「！！」「うおおおおおおおっ！！！！」「！！」

それに伴い、あちらこちらから怒号が響き渡る。皆さん、大変ノリノリである。

ん？俺か？もちろんノってるぞ。

『それでは、もう一度ルールを説明するドラ！制限時間は三時間。ステージは新たに作られたイベント専用マップドラ！ポイントは倒したプレイヤーの数と倒された回数、被ダメージと与ダメージで算出されるドラ！ポイントが高い上位十名には記念品が贈られるから、皆頑張るドラよ？』

ドラゾウの説明を捕捉するなら、参加者はランダムで今回のイベント専用マップに飛ばされる。相手プレイヤーを探したり、逃げたりするのも戦略の一つとなってくる。

—まあ、俺がやることはに変わりは無いが、まずは自分の力で戦う。Zに頼りっぱなしだといざと言うときに大変な事になる。ゲームのストーリーモードでよくあった—

『三ッ！ニッ！一ッ！——ゲーム、スタートドラッ！！』

そんなこんなで思考を回していたらドラゾウのカウントが終わり、同時にスクリーンに表示されていた数字も0となる。

その瞬間、俺は光に包まれ、イベント専用マップへと転移された。

「ここは……どこかの森の中か」

と場所を確認した俺は、「空力」を使い、空中を歩く。「空力」は、デメリット無しで空中を歩くスキルだ。

そして、俺は空から辺りを見渡し、数人のプレイヤーを見つける。どうやら一時的に手を組んでいる様だ。



—じゃ、攻めますか—  
と、俺は【空力】を解き、空から落ちて、攻撃を仕掛ける。

「うわああ！何だ!?!」

「親方！空から敵が!」

「こんな時にネタに走るな!」

「でもじじ!」

と、ぼや騒ぎしている間に、『初心者片手剣』と『ウルトラゼットライザー』に【魔法剣】で【光魔法】を纏わせて攻撃力を上げ、三人位斬り倒した。ちなみに、【魔法剣】は魔法系のスキルと剣系のスキルを所持していると取得出来るスキルで、剣の刃に魔法を纏わせたり、刃を伸ばすことができ、割りを使い勝手がいいスキルだ。

それは置いといて、俺は変則的な二刀流で残りの五人を片付ける。

「さて、まだまだ行くぜ!」

そうして俺は空へと駆け出す

---

### 【MWO】第一回イベント観戦席3

名無しの観戦者

やっぱ優勝はペインか?

ゲーム内最高レベルだし無双してんな

名無しの観戦者

あれはやばい

動きが人間辞めてるw

名無しの観戦者

でもやっぱり順当に勝ちを重ねてるのはよく聞く名前ばっかだな

名無しの観戦者

トッププレイヤーが強いのはそりや当然よ

名無しの観戦者

は？何こいつ…やばくね？

名無しの観戦者

うっわ映ってる奴ら強っ

名無しの観戦者

暫定成績ランキング

唱人って言う二刀流。

五百人潰してる

名無しの観戦者

ふあっ!?

名無しの観戦者

チート？いや…無いか

名無しの観戦者

って言うかそんだけ暴れてたらそろそろスクリーンに映るんじゃないか？

名無しの観戦者

こいつか？今映ってる

所変わってイベントエリア。

「な、何だ!? アイツ!」

「逃げなきゃ!!」

「待避! 待避!」

「逃がすか!」

かれこれ乱闘に上から混ざっては最低でも二、三人を切り殺しているが、いくらかはダメージを受けている。回復はしているが、今一効率が悪い。と、考えていたら

「現在の一位はペインさん、二位はドレッドさん、三位はメイプルさんです! これから一時間上位三名を倒した際、得点の三割が譲渡されます! 三人の位置はマップに表示されています! それでは最後まで頑張ってください!」

と、ドラゾウからのアナウンスが流れた。

「よし、行くぞ!」

即決だった。だが、倒す相手を決めていない現在、近い順で挙げると、ドレット、ペイン、メイプルの順番だが、やはり一位を取りに行くか、近場を取りに行くかで迷っていた。そうしていたら、なんと! ドレットの位置がこちらに近づいて来ている。

接触まであと三メートル……二……一!

草むらから現れたドレットの短剣を唱人の剣で受け止める。

火花を散らしながら互いに相手を見据える。

『野生のプレイヤーが現れた』

「誰が野生のポケ○ンだ」

と唱人の冗談にツツコミを入れるドレット。そして、互いに一旦距離を取り構え

「まさか自分から来てくれるとはね……………」

「ま、ちよつと興味が湧いてな。さあ、始めようぜ」

「ああ！」

俺はそう言つてゼットライザー 〃だけ〃 構える。

数秒の沈黙。それを破るように、そよいだ風が運んだ葉が地面に落ちると同時に、ドレットが走り出した。

俺は走り出すと同時にゼットライザーのトリガーを押し、目の前に「ヒーローズゲート」が現れ、俺は飛び込んで行った

第一回イベント／御唱和下さい、我の名を！

「Z！待たせたな、やるぞー！」

「おう！ウルトラフュージョンだ！」

俺は意識を集中させると、光の中からウルトラアクセスカードが現れる。

それを手に取り、ライザーにセット

『ショウト ACCESS GRANTED』

続いて、ゼットホルダーからアルファエッジに使う三枚のメダルを取り出す

「宇宙拳法、秘伝の神業!!」

「ゼロ師匠」

「セブン師匠」

「レオ師匠」

メダルに描かれたウルトラマンの名前を呼びながらスロットにセットし、ブレードを動かして読み込む。

『「ZERO」「SEVEN」「LEO」』

最後に構えると後ろからZが現れ、両手を広げて叫ぶ

「御唱和下さい、我の名を ウルトラマンZ！」

「ウルトラマン………ゼエエエエエエエツト！」

と叫びながらゼットライザーを掲げ、トリガーを押す。

「へアアッ!!」

「デュワツ!!」

「イヤアア!!」

『ゼロ』『セブン』『レオ』の三人のウルトラマンが光の線を描きながら飛び、一点に集約する。

『ULTRAMANZ ALPHAEEDGE』

---

名無しの観戦者

おい！例の新人とドレットだ！

名無しの観戦者

死んだな、あの新人

名無しの観戦者

まさか『神速』のドレットとぶつかるとは……………

名無しの観戦者

可愛そうに、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏……………

名無しの観戦者

悲鳴嶼さん止めい（笑）

名無しの観戦者

お、そろそろ動くぞ

名無しの観戦者

俺、新人にベツト

名無しの観戦者

俺はドレット

名無しの観戦者

ドレット

名無しの観戦者

『神速』

名無しの観戦者

新人

名無しの観戦者  
ドレット  
名無しの観戦者  
新人少なくて草  
名無しの観戦者  
お、ぶつかる！  
名無しの観戦者  
うわ、眩し！  
名無しの観戦者  
魔法か!?  
名無しの観戦者  
卑怯で草  
名無しの観戦者  
おお、光が収まって……………え？  
名無しの観戦者  
なにこれ  
名無しの観戦者  
誰!?  
名無しの観戦者  
入れ替わって草

---

「な、なんだあ!?!お前」  
といきなり現れた存在に問うドレット

それもその筈。今、目の前にいるのは太古の産物にして、最新の  
ニューヒーロー。ウルトラマンZだからだ

「俺はウルトラマン。ウルトラマンZだ！」  
と、名乗りながら『アルファバースンキック』を放つ。ドレットは短

剣で受け止めようとするが無意味だ。

ウルトラマンZのステータスは基本。10×俺のレベルで成り立ってる。更にそこに、三人のメダルの力で一部の項目に強化がされており、プレイヤー一人吹き飛ばすのは容易だ

蹴り飛ばされたドレットは地面を転がりながら体勢を立て直す

「へーやるじゃねえか。ならこれはどうだ？ 『神速』」

ドレットの二つ名にもなっているそのスキルは文字通り神の速度に至る力。

神の速度が人に認識出来るはずがないという風にして設定された力は、十秒間姿を消すというものだった。

—き、消えた！これじゃあ攻撃出来ないですよぞ！—

—Z。目を瞑れ。早く—

—お、おお—

そうして視界が途切れると、俺は俯いて構える。

—『目に見える物だけ信じるな』先輩ウルトラマン偉大な先人の教えだ—

俺Zは他の感覚を研ぎ澄まし、自身の危機察知能力で背後に感じたドレットの殺意に反応して、振り返りの勢いで『豪脚』を回し蹴りで叩き込もうとする

「うおおー」

驚いたドレットはバランスを崩し、その場に倒れる。

「『ゼットスラッガー』」

そこにエネルギーで繋がれた刃を打ち込み、動きを封じ、Zは目を



開けてドレットを視界で捉える

—ウルトラヒット!—

—これで決める!—

アーマーが光を放ち、腕にエネルギーが集束する。そのままZは<sup>俺達</sup>お約束の必殺光線を解き放つ。

「『ゼステイウム光線』!」

光線はドレットに必中。そのまま大爆散して、紅蓮の華を咲かせた

「ジェア……………」

---

名無しの観戦者

……………

名無しの観戦者

……………

名無しの観戦者

……………なあにこれえ

名無しの観戦者

N……………だよな……………?

名無しの観戦者

でもZって言ってなかったか?

名無しの観戦者

N……………Z……………ああ!

名無しの観戦者

あ(察し)

名無しの観戦者

あ(察し)

名無しの観戦者

あ（察し）  
名無しの観戦者  
でもさ……………あの強さは……………うん  
名無しの観戦者  
別ゲー  
名無しの観戦者  
こんなの絶対おかしいよ！  
名無しの観戦者  
ウルトラマン……………  
名無しの観戦者  
ウルトラマンって何だ？  
名無しの観戦者  
……………これは考察スレを立てなければ！  
名無しの観戦者  
それな  
名無しの観戦者  
それな  
名無しの観戦者  
異議なし  
名無しの観戦者  
異議なし  
名無しの観戦者  
これは決定事項だ！異論は認めん！  
名無しの観戦者  
ネタ多いな（笑）  
名無しの観戦者  
お、終わったぞ  
名無しの観戦者  
だな……………

## 結果と考察

『がおく！終了く！結果、一位ペインさん、二位メイプルさん、三位唱人さんですドラ！それではこれから表彰式に移るドラ！』

第一回イベント終了のアナウンスがイベントステージ全体に響き渡る。

「やっと終わった」

そう呟いた俺は変身を解除し、イベント前に最初にいた広場に転移される。

そして一位から三位までが壇上に上がるように言われたので俺は壇上に上がる。

「では、先ずは三位の唱人さんから、一言どうぞドラ！」

ドラぞうからマイクが渡されたので、俺はマイクを受け取って一言。

「今回の成績は俺一人の物ではありません。俺と一緒に戦ってくれた仲間——ウルトラマンZが居てくれたからここまで出来ました。なので、この場を借りて言わせて下さい。ありがとうございます、ウルトラマンZ」  
「ガオ〜！ありがとうございますドラ！次に、メイプルさん！どうぞドラ！」

マイクを返されたドラぞうが感謝を伝え、二位のメイプルにマイクを渡す。

マイクを受け取ったメイプルは深呼吸して一言。

「えっと、一杯防御できてよかったでしゅ」

盛大に囁んだ。

メイプルは囁んだ恥ずかしさのあまり、後ろを向いて顔を覆ってしまっただ。

「で、では最後にペインさんから一言お願いしますドラ！」

ドラぞうはメイプルからマイクを受け取り、一位のペインへと渡す。

「今回のイベントで一位になれた事は嬉しく思いますが、それ以上に面白そうなプレイヤーがいて、今後戦う事が楽しみに思っています。次のイベントが待ち遠しいです」

ペインはそう言ってドラぞうにマイクを返し、

「ありがとうございます！それでは記念品授与に入りますドラ！」

そして記念品を受け取り、第一回イベントはこれにて閉幕した

---

― 唱人 / ウルトラマンZ 考察スレ ―

名無し of 冒険者

たてたぞく

名無し of 冒険者

スレ立て乙く

名無し of 冒険者

さて…………… 奴の話だな

名無し of 冒険者

ああ…………… ウルトラマンZ…………… 謎だらけの新人だ……………

名無し of 冒険者

下手したらメイプルちゃんより謎

名無しの冒険者

唱人も中々だけどな……………空を走ったりさ

名無しの冒険者

まずは唱人のまとめだ

第一回イベント

唱人三位

死亡回数0

被ダメージ300

撃破数1359

装備は初心者の片手剣と片手斧の様な剣の二刀流で刃が延びる。変わったデザインの服を着て、主に空から襲撃する形でキルを稼いでいた。そして、ドレット戦で見せた『ウルトラマンZ』と言う謎の存在が協力している

名無しの冒険者

何回見てもおかしいとしか……………

名無しの冒険者

空を歩く↓まあ、ありそうだな

刃が延びる剣↓まあ、何かあったね……………

ウルトラマンZ↓は？誰やねん！

名無しの冒険者

まさか『N』が『Z』だったとはな……………

名無しの冒険者

いや、アレはやっぱNにしか見えねえよ……………

名無しの冒険者

ウルトラマンN……………

名無しの冒険者

草

名無しの冒険者

とりあえずどうやったら空を歩けんだよ……………

名無しの冒険者

そんなスキルあるのか？

名無しの冒険者

あるなら取ってる

名無しの冒険者

でも刃が延びるのはまあ、予想はつく

名無しの冒険者

k w s k

名無しの冒険者

【魔法剣】ってスキル知ってるか？

名無しの冒険者

ああ、あの魔法系と剣系のスキルを二つとも取っていると取得出来るスキルだろ？魔法を纏わせる奴。MPとかにもステを振らなきゃ使えないから剣士として致命的な奴

名無しの冒険者

中途半端者のアレな

名無しの冒険者

まさかそれ？

名無しの冒険者

ああ、アレ以外思い付かない。

名無しの冒険者

確かにありそうだけど……MPとINTが足りないだろ

名無しの冒険者

一つだけ心当たりが……

名無しの冒険者

まさかあの小斧剣の補正值か？

名無しの冒険者

うん。

名無しの冒険者

あり得なくは無いか……

名無しの冒険者

まあ、それはそれとして。ウルトラマンZはどうなんだ？

名無しの冒険者

それなんだけど、これを見てくれ

名無しの冒険者

名無しの冒険者が画像を送信しました

名無しの冒険者

画質ワリい

名無しの冒険者

古

名無しの冒険者

これは……………何だ……………？

名無しの冒険者

「ウルトラ決闘歴史」って言う20年前のゲームに出てくる光の戦士『ウルトラマン』達だ

名無しの冒険者

20年前って……………デュアルスクリーンとかODSとかの時代じゃねえか！

名無しの冒険者

なついな

名無しの冒険者

化石

名無しの冒険者

骨董品

名無しの冒険者

時代遅れ

名無しの冒険者

辛辣で草

名無しの冒険者

で、これが例のウルトラマンと？

名無しの冒険者

ああ、このゲームもこれも同じ会社で作られてるからあり得ない話では無いだろ？

名無しの冒険者

確かにあり得そうだな

名無しの冒険者

うん。

名無しの冒険者

じゃあ、今後は他のウルトラマンを調べながらウルトラマンZについて纏めて行く形でいいか？

名無しの冒険者

いいともー

名無しの冒険者

いいともー

名無しの冒険者

いいともー

名無しの冒険者

いいともー

名無しの冒険者

いいともー

名無しの冒険者

いいともー

名無しの冒険者

いいともー

名無しの冒険者

いいともー

名無しの冒険者

いいともー

名無しの冒険者

いいともー

名無しの冒険者

いいともー



## 盾の友達と絵描きの少年

イベントから一週間、唱人はメダルを探しながらレベル上げやスキルの取得に奮闘していた。

この前、いくらか資金が貯まったので、新しい属性魔法のスキルを買って魔法剣の練習をしているらしい。

『水鞭刃』

ジャバアアアン！

とゼットライザーの先から鞭の様に波打つ水流を操り、魚を何匹か倒し、素材を回収する。ここは地底湖の湖の中で現在、『潜水』と『水泳』のスキルで泳いでいるところだ。

—さて、そろそろ上がるか—

唱人はそう思い浮上しようとしたその時、服の首の所に何か引っかけた。

—へ？—

唱人は引っかけた所を触るとソコに針と糸の様な物があつた。

彼はそれで全てを察した。その途端、糸は引っ張られて水面上へと向かう。

—まさか俺が釣られるとはな……ハハッ—

そしてそのまま釣り上げられるとソコには見覚えのある少女が二人いた。いや、片方は凄く知ってる人だわ

片方は黒髪黒目のアホ毛が踊る可愛い少女——メイプルと、もう一

人は茶髪のポニーテールで活発そうな少女。おそらく、メイプルの友人らしき人がいた。

唱人はその場に着地して、二人の方を見てこう言う

「えつと……人間を釣った感想を一言どうぞ」

「ええ!? えつと……お久しぶりです……?」

「え! ちよ? メイプルの知り合い!」

メイプルは取りあえず挨拶をして、ポニテの少女は驚いている。

「そうだな、久しぶり。そっちの娘は、はじめましてだよな? 俺は唱人って言う。メイプルとは……まあ、フレンドだ」

「あ、はい。サリーって言います。メイプルの友達です……」

ポニテの少女はサリーと言うらしい。

——メイプルの友達……多分どつかの方向にぶっ飛んだ人だろうな多分。……うん——

二人の気持ちは同じらしい。

「唱人さんはどうしてここに?」

「ああ、レベル上げとスキル集め。それと少し探し物をな」

「へくそうなんですか」

「うん。それよりこれから休憩で焼き魚を作る所んだけど食う?」

「え? いいんですか!」

と、呑気に休憩がてら飯にしようとしたら

「いやいやいや! さっきの衝撃映像はスルー!」

サリーさんがツツコミを入れる。うん、当たり前だよな。

「泳いでいる人が釣れるのは稀にあるでしょ?」

「ま、まあ……そうですよな」

俺は話しながら魔法で火を起こして、イベントりに仕舞っていた魚を取り出して、串焼きにして塩を振る。

「ほら、出来たぞ。シンプルだが」

「おお、それじゃあ、いただきます」

「あ、ありがとうございます。いただきます」

「じゃあ俺もいただきます」

我ながら塩味の利いて美味しい料理となった。上手い。

---

「へ、二人はメイプルの盾の素材集めに来たんだ」

「うん。あの盾だと攻撃を受ける前に食べちゃうからスキルの取得に向いてなくて……」

「普通は盾は物を食べないけどな」

と、笑いながら話していると最後の頭の部分を飲み込み、串が光となくなって消えた。

丁度同じくらいの時に二人も食べ終わった様だ。

「ごちそうさまでした」

「お粗末さまでした。さて、また潜るか」

「あ、じゃあ私も」

と、サリーも立ち上がって、準備運動を始める。

「さてと……Zさん、そろそろ交代お願い」

と、俺はZライザーを取り出し、話しかけると、左手が勝手にZライザーを構えてトリガーを押した。俺の背後にヒーローズゲートが現れ、続けてアクセスカードをゼットライザーにセットする。

『シヨウト ACCESS GRANTED』

隣でサリーが驚いているが、気にせずそのまま俺の右手はメダルのセットされてないブレードを動かし、最後にトリガーを押した。

するとヒーローズゲートが迫り俺に触れる。ヒーローズゲートが俺を過ぎた時には俺の姿が初めて会ったウルトラマンZの姿へと変わった。

「そ、それが例のウルトラマンですか？」

「ああ、俺はウルトラマンZ。以後、お見知りおきをでございます」

「あ、はい。」

— 実在したんだ、ウルトラマン……—

「いや、私も初めて見たときはビックリしたよ。あの“ウルトラマンが本当にいるなんて”

「え？ご存知ですか？我の事」

Zはメイプルが自分自身の存在を昔から知ってる様な口調に驚いて質問した

「うん。クラスにとってもウルトラマンに詳しい男の子がいるの！」

「あ、アイツね。毎日一枚は書いてるよね。無駄にクオリティが高くて美術部からスカウトが来ている帰宅部の」

— ほぼ、境遇が似ている所がほぼ一緒じゃないか。—

「そうなのか。ウルトラ会ってみたいな」

と、唱人は感心して、Zはそう言う。

その後、二人で湖に潜り、魚を狩っている途中でサリーがダンジョンを見つけ、後日ユニークシリーズを手に入れたらしい。

そうだ、二層に行こう

「ねえ、二層に行かない？」

「ん？」

「へう？」

現在俺はメイプル達と一層のスイーツ店で食事がてら臨時のパーティに勧誘をしている。ちなみにスイーツは俺の奢りだ。

「実はこの前のメンテでスキルに弱体化がかかってな。一人で攻略するのは厳しいから人手が欲しいんだ。もしかして二人はもう着いた？」

「んん。まだだよ」

「そうね〜……もしかして奢ったのってこの為？」

「うん、そうだよ」

俺がハッキリ言うとサリーは凄く呆れてジト目になった。正直なものあまり良くないかもしれない

「まあ、私はメイプルが良かったらいいわ」

「ん？私は全然いいよ〜」

「じゃ、よろしくお願いします」

「うん！よろしくね〜」

「じゃ、行きますか」

---

「所で、弱体化ってどんな感じなの？」

「ああ、それな。結構多くてな」

と、俺は事の詳細を語り始めた。普通は言わない物だが、ここは連携の都合上仕方無い。

「先ず『ウルトラマンZ』になるにはHPが3割を切らないといけない事。後、等身大でなる時は『インナースペース』が使えない事。そして『空力』を使うと一步に付きMPを1消費する……と割と食らった」

「うわゝウルトラマンの修整が酷いわね。完全に弱体化してるわ」

「でもしようがないと思うよ。Z曰く、アイツのは今より強くなるらしい。それを見越してなら丁度いい位じゃないか？」

「何とも言えないわね……ちなみに等身大って言ってたけどもしかして」

「Z本来の大きさにもなれるらしいけど、3分間だけ。しかもインターバルが20時間と設定通りで感服です」

「ほえゝ詳しいんだね。やっぱり昔から好きだったの？」

「ああ、幼稚園の頃の将来の夢に『ウルトラマン』って書いたぐらいだからな。同年代の奴らにはピンと来なかったらしいけど」

—まさかこんな形で叶う日が来るとはな—

「あ、着いた〜！」

「さて、行くか！」

「そうね！」

俺はZライザーと片手剣を構え、メイプルは白い盾を、サリーは青い短剣を構える

「行くぞ！」

俺の合図と共に俺達は、二層へのダンジョンへ踏み込んだ。

---

ダンジョンはそこまで深くなかったようで、約十回ほどモンスターとの戦いを挟んだだけで、ボス部屋に到達することが出来た。

その大扉を開けて中に入るとソコには天井の高い広い部屋で奥行きがあり、一番奥には大樹がそびえ立っている。

俺達が部屋に入って少しすると背後で扉が閉まる音がする。

大樹がメキメキと音を立てて変形し、巨大な鹿になってゆく。

樹木が変形して出来た角には青々とした木の葉が茂り、赤く煌めく林檎が実っている。

樹木で出来た体を一度震わせると、大地を踏みしめ俺達を睨みつける。

「来るよ！」

「おっけー！」

「ウルトラ気合入れて行くぜ！」

鹿の足元に緑色の魔法陣が現れ輝き出す。

戦闘開始だ。

3人で……？

鹿が地面を踏み鳴らすと魔法陣が輝き、巨大な蔓が次々に地面を突き破り現れ、シヨウト達に襲いかかる。

「よっ！と……」

「ははっ！遅いね！」

「焼ける焼ける！」

メイプルの大盾は正面からその蔓を受け止めて飲み込む。サリーは自慢の回避力で、唸りを上げて襲いかかる蔓を難なく躲す。シヨウトは【魔法剣】で剣に火を纏わせ焼き切る。

メイルの火力はメイプルの新月。メイプルがカウンターとばかりに毒で作られた竜を放つ。

それは蔓を飲み込み溶かし消し飛ばして鹿へと迫るが、毒竜は鹿の目の前で緑に輝く障壁に阻まれて消失した。

「えっ!?？」

「多分、あの魔法陣だよ！攻撃が通ってないよ！」

鹿は再度蔓を伸ばして攻撃してくる。それ自体は三人にとっては問題で無いのが救いといったところだろう。

しばらくそうして耐えていた三人だったが埒が明かないと思ったサリーが提案する。

「ちよつと観察に回るから、防御を受け持ってくれる？」

「分かった！……【挑発】！」

「了解！」

蔓の向かう先が明らかにメイプルに偏るが、メイプルに集中したと



ところでシヨウトが焼き切る。その隙にサリーが実験に回る。

魔法で攻撃を重ね障壁を何度も出させているうちに、サリーはついにあることに気付いた。

「角の部分には攻撃が通るよ！…あと、障壁はあの林檎が維持してるっぼい！」

サリーが木の葉の中で煌めく林檎を指差す。障壁発動時には林檎がより赤く輝いていた。

「じゃあ…私に任せて！纏めて吹き飛ばすから！」

「了解」

「うん、お願い！」

メイプルが新月を突き出す。再び現れた毒竜は今回は障壁に阻まれることなく木の葉全てを飲み込み溶かした。

「【ウィンドカッター】！」

今度は障壁に阻まれることなく鹿に攻撃が通った。赤いダメージエフェクトが散る。

「よしっ！通った！」

「大技でいくよ！」

「いっけー！ー！ー！」

大盾に浮かんでいた結晶がパリンパリンと音を立てて割れると共に新月から巨大な紫の魔法陣が展開される。それはしばらくして光を増し、三つ首の毒竜となって鹿に襲いかかった。

鹿の体が溶けて赤いエフェクトが絶え間なく溢れる。間違いなく致命的ダメージだった。

しかし、鹿の足元の緑の魔法陣が一際輝きその傷を癒す。HPバー

を三割まで回復すると毒の状態異常を取り除いて魔法陣はその役目を終え、薄れて消えていった。

「粘るな……………」

「さっきのつてまだ撃てる!?!」

「いけるけど、ちよつと時間かかる!」

相談するのを鹿が待つてくれる筈も無く、行動パターンが変わった鹿が風の刃とさらに太くなった蔓で攻撃してくる。

さらに

「っ!」

「うううわあああつ!」

「チィ!」

地面が急に隆起して足元から三人を攻撃してくる。サリーはそれを敏感に察知して躲したがメイプルとショウトは空中に弾き上げられた。

ノーダメージではあったが、メイプルは地面に叩きつけられると、「スタン」の状態異常を受けて倒れたままだ。本来なら生存は絶望的だがその後、風の刃を受けてもHPバーが減っていないのを見るに起き上がるまで耐えられるだろう。

だが、メイプルのスキル発動も大幅に遅れることとなることは確かだ。

ショウトは「空力」を使い空中で受け身をとったので「スタン」にはならなかった。【HP】も余裕がある

「さて……………俺達で片付けるか」

「そうね」

二人は駆け出し、攻撃の隙間をぬって確実に鹿の足元に近づくとサリーは【跳躍I】で、俺は【空力】で鹿の目の前まで飛び上がる。

鹿の目の前まで飛び上がる。そこは風の刃の止まない戦場で唯一静かな安全地帯。

「ここが安地なのは分かってるんだよ?…【ダブルスラッシュ】【パワーアタック】！」

「しつかり食らってきな【魔法剣・風光】」

サリーは体を回転させて両手のダガーでの四連撃と額から首筋にかけてを切り裂く二連撃を、シヨウトは風を纏った剣と光の剣身を現したゼットライザーで連続攻撃を放つ。

二人の連続攻撃がついにHPバーを削り取ったその時。

「んんっ…:…:そ、そうだ！戦わないと…」

メイプルがようやく起き上がり鹿を見据えた。

とはいえ、目の前で光となって爆散する鹿を見届けることしか出来なかったが。

「えええええええええっ!??!?」

「あれ?起きた?」

「寝てる間に二人で終わらせちゃった」

サリーが戻ってきてそう言う。

メイプルにとってはなんとなく腑に落ちないダンジョン攻略と  
なってしまったが、仕方ない

とにもかくにも、三人は二階層進出の権利を手にしたのだった。

イベントは3人で

あれから数日後、俺達は第二層の町にいた。

今日は第二回イベントの日ということで、気合いもバツチリ、準備も出来る限りやりきつてある。

ここで、運営からのアナウンスが入った。

「今回のイベントは探索型ドラ！目玉は転移先のフィールドに散らばる三百枚の銀のメダルを十枚集めることで金のメダルに、金のメダルはイベント終了後スキルや装備品に交換出来ますドラ！」

そうアナウンスが流れステータス画面が勝手に開き表示されたのは、金と銀のメダルである。

その内金のメダルは見覚えがあった。

金のメダルは前回イベントの記念品で手に入れたあのメダルだった。

「前回イベント十位以内の方は金のメダルを既に一枚所持しています！倒して奪い取るもよし、我関せずと探索に励むもよしです！」

幾つかの豪華な指輪や腕輪などの装飾品、大剣や弓などの武器などの画像が次々に表示されていく。全てこれから行くフィールドの何処かに眠っているのだ。大盾はあったが、イベントとは別のメダル——ウルトラメダルは無かった

チクシヨウメー！

「死亡しても落とすのはメダルだけです！装備品は落とさないのだから安心して下さい！メダルを落とすのはプレイヤーに倒された時のみです。安心して探索に励んで下さい！死亡後はそれぞれの転移時初期地点にリスポーンします！」

取り敢えずは一安心である。

装備品を奪われないのならばある程度は気楽に出来ることだろう。

探索も全力を出せる。

「今回の期間はゲーム内期間で一週間、ゲーム外での時間経過は時間を加速させているためたった二時間ドラ！フィールド内にはモンスターの来ないポイントが幾つもありますのでそれを活用して下さいドラ！」

つまり、ゲーム内で寝泊まりして一週間過ごしても現実では二時間しか経っていないと言う訳だ。

「なんていうか不思議な感じだね」

「ちよつとした旅行みたいだね」

「確かに。でも一度ログアウトするとイベント再参加が出来なくなるって、だから最後まで参加するにはログアウトは出来ないね。後は…パーティーメンバーは同じ場所に転移するってさ」

俺達は説明を耳で聞き、ステータス画面に流れてくるのを目で見て、相談した結果ログアウトはしない方向に決めた。

「三人分のメダル、取れるといいね」

「欲を言えばウルトラメダルも欲しい」

「うん、頑張ろう！」

俺達の体は光となり、第二層の町から消えていった。

「ん……着いた？」

「着いたみたいだね」

「広いな」

足に伝わる大地の感触。

俺達がいいたのは開けた草原のど真ん中だ。

空には重力の影響を受ける事なく浮遊する島々が見え、遠くの方には山岳地帯なども見えている。そして広く、澄み渡る大空を竜が優雅に飛ぶ姿も見る事が出来た。

運営が用意した今回のフィールドは自然豊かな、モンスター達の理想郷。

誰もが夢見た事のあるファンタジーの世界を写し取ってきたような幻想的な世界だった。

「おおー！綺麗！」

「まるで異世界だな」

「すっごい……綺麗すぎてぞくぞくした」

俺達は草原を話しながら歩いていく。二十分程歩いたが他のプレイヤーには遭遇することは無かった。前回、俺やメイプルがすぐに会敵したことを考えると、今回はかなり広めに設定されたステージなのかもしれない。

「メダルとか見つかるかなあ……」

「さあ？まあ、じっくりやろう？まだ時間はあるしね」

「多少は遊んで行きたいね」

そんな話をしていたのだったが、ここで右手に背の低い草を掻き分けてゴブリンが走ってくるのが見えた。どうやら俺達を狙っている

らしく左へ左へ進んでみても追いかけてくる。

「ゴブリン相手なら…白雪でいいかな」

とメイプルが黒い大盾から白い大盾に装備しなおす。この前聞いたのだが、黒い大盾のスキル【悪食】には回数制限があつて、無駄遣いする訳にはいかないかららしい。

「私は当分はこの装備でいってもいい？いざという時は闇夜ノ写に換えるから」

「おっけー！頼りにしてるよ。今回は「行つてきます」え？」

と、俺はゼットライザーを振り抜く。ゴブリンはその手に持った棍棒で受け止めようとするが、その粗悪な武器では俺のライザーを止める事は出来なかつた

スパツと切り落とされた棍棒と共にゴブリンの体に深々と赤い筋が入る。

そして、最初の襲撃者は呆気なく光となって消えていった。

「おー！やっぱり速いね！」

「ちよつと、話してる途中だったでしょ」

「すまんすまん、浮かれてた。それにしてもこの辺は弱いモンスターのエリアなのか？メダルは無いかもしれないな……」

「んー…そうかも。メダルはもつと分かりにくい所に隠してあると思う」

メイプルの意見にサリーも賛成のようを取り敢えず洞窟や、森林などモンスターの多そうな地形を探して回ることにした。

それから歩くこと一時間。

「右、草原！左、草原！後ろ、草原！前、草原っ！」

サリーがヤケになって叫ぶ。何処を見ても草原しかない。地平線まできつちり草原だ。

「広すぎるよ……さつきからゴブリンしか出てこないし……ほらまたいた……」

メイプルの言う通りゴブリンが捕らえた獲物なのだろう兎を引きずりながら歩いていった。メイプル達には気づいていないのだろう、嬉しそうにゲギャゲギャと耳障りな声で笑っている。

「何か出てこないかな。 (ウルトラ)メダルとか (イベント)メダルとか (どうでもいいけど)ドレットとか」

と両手を頭の後ろで組んで空を見ながら呟く。青空に「誰が野生のポケ○ンだ」とツツコむドレットの幻影が見えたのは作者の演出だろう

そしてゴブリンは俺達が見ている中、そのまま【歩いて】地面に沈んでいった。

「……え (へ)？」

呆然と立ち尽くしていた三人だったが、はっと正気に戻るとゴブリンが消えていった場所へと急いで向かう。

「な、何も無い？」

「でも、確かに何が……」

「いや……絶対何かある！あるはず！」

サリーが何かを閃いたのか、その辺りの空間に【ウィンドカッター】を撃つ。



それは歪んだ空間を切り裂いて、その場の景色を正常に戻した。

二人の足下には地下へと続く階段があった。

「【蜃気楼】みたいなスキル：それで入り口を隠してた。もしかしたら、他にも入り口はあったかも。この草原広いしね…」

「入る？」

「当然！念入りに隠したこの洞窟：きつとメダルの一枚や二枚あるって！」

「異議無し」

「よーしー！じゃあいこうー！」

三人は洞窟の中へと入っていった。

---

「よっ…とー！」

サリーのダガーがゴブリンの顔面を切り裂く。

「フッー！」

俺の剣とゼットライザーがゴブリンを輪切りにする

内部のモンスターも特に強い訳では無かったため、俺達の攻撃で簡単に倒れていく。

道幅は二人が並んで歩ける程度で三人だと少し狭い

「また分かれ道…」

メイプルが呟く。

メイプルの言うように、この洞窟は分岐が非常に多い。まるで蟻の巣のように何本もの道が伸びていて、行き止まりや小部屋も多い。

「どつちに行くか…メイプルどうする?」

「…じゃあ、右! 右は下へ向かってるし、ボスがいるなら深いところ  
だと思う!」

「なるほど」

「おっけー、じゃあ右で」

俺達は道を進んでいく。そして、少し大きめの部屋に入った。

その時。咆哮が響き渡り、地鳴りがする。

俺達は直感した。これはボスの咆哮だと。

それと共に、二人の元へと近づく足音、金属音。それに不快な鳴き  
声。

「ボスが何か指令出したかも、ゴブリンが集まってくる!」

「どうする?」

メイプルの問いに俺とサリーは武器を構えつつ言う。

「この部屋に続く道は二つだけ!」

「事足りる!」

「オツケー! 任せるよ!」

メイプルはまだ大盾を切り替えない。

ボスまでは取っておかなければと考えているのだ。

さてさて沢山のゴブリン達が出迎えて来る

—さて、やれる所までやってくか!—

輪切りにしてやるぜ！（フラグ）

「毒竜！」

メイプルが最初から全開で攻撃する。攻撃回数を増やせば増やすほどメイプルの攻撃能力は無くなっていくからだ。出来れば一発で片付けたい。

部屋に雪崩れ込むゴブリン目がけて撃った毒竜はゴブリンの眼前で光り輝く障壁に止められてしまう。

通路の奥。

ひしめくゴブリン達の最奥に帽子を目深にかぶり杖を構える三匹のゴブリンがいた。

恐らく、その三匹の魔法なのだろう。

しかし、それは奥の手だったのか三匹は全員が肩で息をしている。

それだけメイプルの攻撃は強力だったのだ。

しかも、毒竜の被害はそれだけではない。

たとえば防がれようとも、周りに撒き散らした毒そのものは消えはしない。

その毒に触れたゴブリンが苦しみ、倒れて光となって霧散する。

それでも。

ゴブリン達は倒れる仲間が消える前に、その体を踏み台にして毒の海を越えてくる。

ボスからの指令に逆らうことなど出来ない。

ただ、目の前の敵に向かっていく。

「魔法剣：光闇！」

が、相反する属性を纏った刃が毒の海を超える者を切り裂いて行く。

最後のゴブリンを切った時。ちょうどメイプルとサリーも戦闘が終わったようでシヨウトの方を向く。

そして、魔法使いのゴブリン達に気付き魔法攻撃を開始した。

「ファイアボール」！さらに、「ウィンドカッター」！

「オマケの【天翔閃】」

防御力は無かったようで、魔法使いのゴブリン達は呆気なく沈んだ。

「お疲れ、二人とも！」

「お疲れメイプル。にしても、派手にやったねー」

「そうだな……凄え」

二人は驚きと呆れの混じった表情で毒の海を見ていた。

「えへへ……そんなことより行こう！きつとこつちがボスだよ！」

メイプルは照れ笑いを浮かべつつ話を変える。

「そうだね、行こうか……よっー！」

サリーはゴブリンが苦しんだ毒の海を飛び越え、俺は空を走る。メイプルは勿論歩いて渡る。

「私が触れたら一発アウトだよ」

「俺も心許ないな……………」

「気をつけるね」

「お願いします」

三人は洞窟の奥へ奥へと向かっていった。

---

「ボス部屋っぽい部屋発見！」

目の前には道中には一つも無かった扉の存在があった。

五メートル程の木製の扉を開き中へと入る。

中は広く、薄暗い。

天井までは十メートル近く、周りを見るに横幅も同じくらいだ。

そして奥行きだけはその倍程でその最奥には巨大な玉座。

そして、そこには通常のゴブリンの三倍近い大きさをほこる醜悪な面のゴブリンが座っていた。

ゴブリンが三人に気付いて咆哮する。

凄まじい音量に三人が顔を顰める。

「さつと倒しちやおう！あいつづるさい！」

「黙らせる……………」

「同感、行こう！」

サリーが頷く。

メイプルの大盾は闇夜ノ写に変わっており、決戦仕様だ。

ゴブリンまでの距離はおよそ二十メートル。

サリーとシヨウトが最速でその距離を詰めようとする。  
しかし、ゴブリンはそれを許さない。

玉座の真横、立てかけてあった巨大なサーベルを手に取りつつ立ち上がると、前進しつつ乱暴に振り抜く。

凄まじい剣圧と共に迫る凶刃。

「【カバームーブ】！【カバー】！」

サリーがこれを回避出来たかどうかは分からない。メイプルが身の丈の二倍はあるそのサーベルを恐れずに大盾で受け止めて消し飛ばしたからだ。圧倒的な破壊力で敵のメインウエポンを戦闘開始早々削り取った。

サーベルが光となって消えていく。

「ナイス！よしっ……！」

とゴブリンが二人に気を取られているその時、シヨウトは光と炎の二刀流を携え、死角に立っていた。

「輪切りにしてやるぜ！」

と言いながら、彼は不規則に立ち回りながら無造作に剣を振るい、ゴブリンをあちこちから斬りまくった。

最後に大きく振りかぶった十六撃目が止めとなり、ゴブリンはバラバラになって消えた。

「ふう、二人ともお疲れ様」

「お疲れー！」

「お疲れ様……？あの十六連撃は狙ってたの？」

「さあね。それより宝箱見に行こう」

「あ、そうだった!」

話題をごまかしながらも、三人はゴブリンが座っていた玉座の元へ向かう。

そこには装飾は無いものの大きめの宝箱があった。

「開けるよ?」

「うん」

「おっけー!開けちゃって!」

サリーが宝箱を開ける。

中に入っていたのはゴブリンが持っていたのと同じ見た目のサーベル。そして、銀色に輝くメダルが二枚だ。

「やった!メダルだ!」

「しかも二枚、二枚だよ!」

二人はサーベルなどそっちのけでメダルに夢中になる。そもそも、サーベルは二人とも装備出来ないのだから興味がなくて当然とも言える。

なので俺はサーベルを手にとってその性能を見る。

---

【ゴブリンキングサーベル】

【STR+75】

【損傷加速】

---

「うわあ…なかなかの脳筋武器だ…」

「どういう感じ?」

「壊れやすくて長時間戦闘は出来ないけど、STR+75」

「私達じゃ装備出来ないよね?」

「うん」

「じゃあ、メダルは二人にあげるからコイツ貰っていい？」

「そうね」

「いいよー」

シヨウトは貰った戦利品をイベントりに仕舞うと二人を目線で追う。

「次のダンジョン探しに行く？玉座の裏に魔法陣あるし、乗れば外に出れると思う」

「……あと一つくらいなら今日中に行けそうかな？スキルも持つと思  
う！」

「なら決まりだな」

三人は相談を終えると魔法陣に乗った。

メイプルの【悪食】のことを考えると一日の内に出来るだけ探索して使い切りたいところだ。

明日に持ち越しは出来ないため、攻略出来る数が減ってしまう。

---

そして光が消えるとそこは元の草原だった。

「忘れてた……取り敢えず、草原を出るところから始めないと……」

「ど、どっちに行くのがいいかな？」

「前進あるのみ！確実なのはそれだな」

「それもそうだね！」

三人は山岳地帯を目指して歩き出した。



邂逅―赤い少女と赤い珍獣と赤いアイツ―

あれから何時間か歩いて、とある森にたどり着いたシヨウト達。この後は事前に話してシヨウトは単独で出稼ぎで動いている。が  
……………

「ふう……………一人になった途端これか……………」

俺の所に何十人かが奇襲で襲ってくる。一応、全員倒せたが〔HP〕は半分を切っているし、MPポーションを3つも使っちゃまった。やっぱり燃費がアレだな

「俺が何をしたってんだよ……………」

と、愚痴を溢しながら倒したプレイヤーが持っていた合計4枚のイベントメダルを手で遊ぶ。

そろそろと思いたったか休憩を切り上げて帰ろうとしたその時、

ドーン！

遠くの方から爆破音が聞こえた。何かと思い、〔空力〕ときつき取得した〔跳躍I〕で飛び上がった後、この前取得した〔遠見〕で爆破地点を見つめる。目に写った光景は――

赤い複数のプレイヤーが赤い何かを守りながら赤いアイツと戦っている所だった

遡る事数分前。

野営の為、丘の上で陣を構えようとするギルド『炎帝の國』。そのギルマスである赤い髪に赤い装束の魔法使い——ミイに一本の報告が入る。

『近くに赤い小さなモンスターらしき存在を発見。ですが、【HP】らしき表示は無く、慌てているもよう』

「ふむ、倒せないモンスターか……」

「どうしたんですか？ミイ」

「何かあったのかい？」

ミイが報告の内容を疑問を抱き、思考を回し始めたその時、二人のプレイヤーが話しかける。一人は白の僧衣を纏う金髪の女性『ミザリー』もう一人は白黒柄のローブを被った小柄な男性『マルクス』。

この『炎帝の國』の幹部に当たる人物だった。

「実は——」

ミイが先程届いたメッセージの内容を伝え、二人の意見を聞く。

「倒せないモンスターですか……イベントのギミックですかね？」

「でも襲ってきたら倒せたくない？【HP】無いんでしょ？」

「もしそうだとしたら、我が爆炎で地の彼方へ吹き飛ばすまでだ。メダルが手に入るとしたら行くべきだと思うが」

「そうですね……」

「僕はパス。拠点の周りにトラップを仕掛けているよ」

「なら、ミザリーもここにいてくれ。私と何人かの同胞で行く」

と、話が纏まり、ミイは3人程の部下を連れてその場へ向かう

メールに送られた地点まで来ると部下と合流することが出来た

「あ、ミイ様！よくぞここまで」

「アチラになります」

と指を刺された方を見るとソコには赤くゴツゴツとした体に白い手足と尻尾。そして全長1メートル程の風船を持った小さなモンスター……否！ウルトラマンファンなら誰もが知っている怪獣。【友好珍獣】こと『ピグモン』である！

そして、ピグモンはその場をを慌ただしくウロウロしていた。

「ふむ、モンスター……だよな」

「はい………多分」

「少し………カワイイ………ですかね？」

「ブサカワいってやつですかね………」

「敵意は無さそうだが………接触してみよう」

と、ミイがピグモンに近づく。するとピグモンはミイの存在に気づき、ステテテテテーつと駆け寄ろうとして、転んだ。

「………敵意は無さそうだな」

「間違いありませんね」

と、ミイの言葉に部下が同意する。

とりあえず、ミイはピグモンを優しく起こすとソレはまるで命乞いをするように振る舞った

「キヤキヤ、キヤキヤツキヤ、キヤ！」

「えつと………すまん。言葉が分からぬ………」

ピグモンは何とか伝えようと身振り手振りで伝えようとしたその

時だった。どこからとも無く霧が出始める。

「キヤキヤキヤ、キヤツキヤキヤ、キヤー！」

と、ピグモンは震えながらミイ達に逃げるように促す。

が、遅かった。

霧の向こうから全長180cm程の人影

「なるほど……………いきなりか……………総員！戦闘準備！」

ギミックの一つと判断したミイの声に構えるプレイヤー。が、霧の向こうから現れたのは、彼女達にとって正に未知の存在。

真っ赤なボデイに弁髪帽を被ったような頭部、独楽の上にアンテナが立ったような耳と、ウルトラマンとはどこか違う何とも得体の知れない外見をしている。

その名は『レッドマン』

【赤い通り魔】の二つ名を持ち、怪獣を残酷的な方法で狩り尽くす者だ。

ミイは短剣の様な杖をレッドマンに向けて構える。

ヤツは両手を伸ばし、真上まで上げると左右に開いて肩まで腕を下げ、そのままファイティングポーズを取ると同時に叫ぶ

「レッドファイツ!!」

それは怪獣にとつての死刑宣告。もちろん、彼は邪魔をするなら他の宇宙人だろうと容赦しない。

おそらく、それは人間でも変わりないだろう。

レッドマンはピグモンに向かって駆け出す。「怪獣だから」それだけの理由でその小さな命を奪う為に

「させんぞ! 『炎帝』!」

ミイが放った魔法がレッドマンに直撃し、爆破。

そして事は冒頭に戻る……………

---

「ピグモン!?何でここに!?!」

そう言いながら地面に降りて駆け出すショウト。

「とにかく、助けに行こう 『超加速』」

ショウトは更にスピードを上げて、ピグモンの元へ向かう。

昭和のヒーロー?と令和のヒーロー。

激突の時は近い……………

## 邂逅―昭和と令和と御唱和と―

「ソコの二人はソイツを安全な場所まで下がらせよ。終わったらコツチに加勢してくれ」

爆煙が晴れると、最初に目が入ったのは十字架の様な2本の槍と赤いアイツ。

『レッドアロー』

ソイツは、そう叫びながら2本の槍をピグモンとミイに向かって投げる。

「させるか！」

二人との間にタンカーの男が入り、盾で弾こうとするが、無情にもその盾は貫かれる。

だけならまだ良かったかもしれない。運営がヤツに与えた力はこれだけでは無かった。

「アガッー！」

レッドアローはタンカーの肩も貫き、そこから本来ありえないモノが吹き出した。

「え……………」

それは赤く、トロリとした粘着質な生温かい液体――血。

「あ、ああ、あああああああああああ！」

余りに唐突な事に思わず叫ぶ男。その光景から他の者に伝播する様に恐怖が伝わる。

だが、それで攻撃の手を緩めるヤツでは無い……………

『レッドパンチ』

と、レッドマンは男の顔を殴る。胸座を掴み、何度も何度も殴る。

「え、『炎槍』！」

とミイがレッドマンを引き離そうと炎の槍を放つ。が、レッドマンは盾の男をそのまま自分の盾として利用した。

「な!？」

あまりの残虐振りに思わず声を漏らすミイ。その間に一気に接近して斬りかかる剣士の少女。

「このっ！」

だが、彼の武器は槍をだけでは無かった。

『レッドナイフ』

先ほどまで「何も無かった虚空」から、大ぶりのナイフが現れる。

レッドマンは盾に使っていた盾の男を剣士に投げる。

「ぎゃあー！」

剣士は投げられたタンカーにぶつかってしまい、動きが止まる。

レッドマンはそのスキを逃さずに、レッドナイフで男ごと剣士を貫く。

「コフ…」

と口から血を吐き出しながら。消えていく剣士とタンカー。

その光景に呆然とするミイと戻ってきた炎帝の面々。だが、ヤツの攻撃はまだ終わらない

『レッドレーザー』

頭部の黄色いランプから熱光線を辺りに放つ

「うわあああああ！」

「きやあああああ！」

「うおおおおお！」

「ぐはあああああ！」

大地が爆ぜ、吹き飛ばされる炎帝の國。

「な……………何なんだ、コイツは!?!」

と、地面に叩きつけられ満身創痕になりながら声を上げるミイ。残った部下もかなりの重症だ。

レッドマンは彼女達に目もくれず、ピグモンの元へ歩き出す。

「ま……………て……………」

弱々しく手を伸ばすミイ。もはやそれすら眼中に無いレッドマン。

そして、奴は恐怖で動けないピグモンを視界に捉えると再びナイフを出す……………

『レッドナイフ!』

「やめろおおお！」

ミイの制止の叫びは届かず、ナイフが投げられる。ピグモンは恐怖で目をギョツ閉じる。



ザシユ

ナイフが刺さり、鮮血が舞う。  
赤い血がピグモンにかかる。

「……キユ?」

ピグモンが恐る恐る目を開くと、目の前には血の滴るナイフとそれから守る為に開かれた大きな手。

その手の主の方を見るとソコには、銀髪に銀色の瞳を宿した少年――シヨウトがいた。

「無事か?」

彼が優しい声で安否を訪ねるとピグモンは「キユキユ!」と頷く。

それを見たシヨウトはピグモンから視線を外して、レッドマンの方を向く。

「なぜピグモンを狙った?」

今度は重く冷たい声でレッドマンに問う。

それもそうだ。ピグモンはとっても友好的な怪獣で、ウルトラマンを助けたことは多々ある。

そんなピグモンを傷つけようとする。不届きものを許すものがあるだろうか? 否! 許す筈が無い、許して言い筈がない!

腹が煮えたぐる様な気持ちでシヨウトは問うが、レッドマンは答え

る気配は無く。そのままファイティングポーズを取ると

「レッドファイター！」

そう叫んで駆け出す。

「そうか。なら、アンタだけは………落とす！ 『雷縛刃』」

と、シヨウトはゼットライザーから雷の刃を伸ばし、レッドマンを縛る。そして、この雷縛刃には縛った相手を15%の確率で1分間【スタン】にする効果もあり、それによって動きはしばらく止まる。

そしてシヨウトは手に刺さったナイフを引き抜き、ゼットライザーを構える。

「待たせたな、相棒！」

そう言ってトリガーを押して【ヒーローズゲート】を開き、アクセスカードをセット

『シヨウト ACCESS GRANTED』

次にホルダーから三枚のメダルを取り出し、言い放つ。

「宇宙拳法、秘伝の神業！」

端から見たら、いきなり大声出す不審者の用になってしまい、炎帝の國の一同はポカーンとなってしまうが、ほっというてメダルを填めていく

「ゼロ師匠」

「セブン師匠」

「レオ師匠」

ブレードを動かして読み込み、一枚一枚に描かれているウルトラマンの名前が呼ばれる

『ZERRO』『SEVEEN』『LEO』

構えをとると後ろにZが元のサイズで現れ、両手を広げて叫ぶ

「御唱和下さい、我の名を ウルトラマンZ！」

「え？あ、え……………ウルトラマンZ！」

「ウルトラマン……………ゼエエエエエエエエエエエエエエエエエツト！」

Zの掛け声につられて叫ぶミイといつものノリで叫びながらゼツトライザーを掲げ、トリガーを押すショウト。

「ヘアアツ!!」

「デュワツ!!」

「イヤアア!!」

『ゼロ』『セブン』『レオ』三人のウルトラマンが光の線を描きながら飛び、Zが光になってショウト元に集約する。

『ULTRAMANZ ALPHAEDEGE』

ソコには等身大の「ウルトラマンZ アルファエッジ」が立っていた。

## 赤いアイツらの決着

『レッドキック』

「『アルファバーンキック！』」

赤い足と炎を纏った足が攻めぎ合う。

『レッドレーザー』

「『ゼステイウムレーザー！』」

二本の熱光線と一本のビームが拮抗する。

『レッドナイフ！』

「『ゼットスラッガー！』」

二本のナイフとスラッガーヌンチャクが幾度もぶつかり、火花を散らす。

「凄い……………」

フラフラと立ち上がりながらミイはそう言う。

が、戦況はあまり良い状態ではない。負傷者は複数人いて、ゼットも徐々に押し返されている。

—おいおい、お強いはずぞ。コイツ！—

「ああ、でも負けるわけにはいかねえ！」

するとZは距離を取って溜めを取る。そして、両手を十字型に組み、必殺の光線を放つ。

「『ゼステイウム光線』！！』」

これで決まる。そう思ったその時、

『レッドアロー』

とレッドマンが十字架の槍を投げる。すると真っ直ぐと放たれる

光線の中を貫きながら、槍はZへと向かう。

「ヤッベー！」

Zは光線を止め、回避にまわる。

—ウルトラ洒落にならねえぞ！シヨウト！—

「ああ、でも勝つぞーZー！」

正直、必殺技を止めるような相手と戦いたくない所だが、回りの人達をつれて逃げる事も出来ない為、逃げられない

え、一人で逃げろよ？バカ野郎！そんなのウルトラマンじゃねえだろ！ヒーローが守るべきものを置いて敵に背を向けるなんてあり得ねえだろ!!

「な、何か……………出来る事は……………」

とミイはイベントトリを開き、出来る事を探す。するとその中に光る何かを見つけた。

「これは……………」

それはこのイベントとは関係ないメダル。だが、それは“あの日”( <https://syosetu.org/novel/236326/3.html> 参照) 自身の元へ飛んできたメダルだった。「確か同じようなメダルを使ってたな……………」

とミイはシヨウトがウルトラマンに成る際に事を思い出す。そして今、このメダルに望みをかける

「ウルトラマン！」

「ジエア？」

「これは貴様のか!?!」

「ウルトラメダル!?なんで、それを！」

「そんな事は後で良い！で、貴様のなのか！」

「一応、な！」

とレッドマンと格闘しながら答える

「そうか。なら………持つてけ!」

とZに向かってメダルを投げる。

「よつとー!」

【豪脚】でレッドマンを蹴り飛ばし、投げられたメダルを受け取る。

「ウルトラマンのメダルだ!」

ショウトはメダルのウルトラマンを確認する。描かれていたのは、全ての決闘伝説の始まりの巨人、『ウルトラマン』だ。

そう驚いてると、メダルホルダーが勝手に開き、「エース」と「タロウ」のメダルが目の前に来た。

『マン兄さん、エース兄さん、タロウ兄さんのメダルだ!! ショウト! 真っ赤に燃える勇気の心を手に入れるんだ!!』

「おうー!」

とショウトはゼットライザーのブレードを戻して、待機状態にする。

そして、目の前の二つのメダルを手にとった

「真っ赤に燃える、勇気の手!」

「マン兄さん」

「エース兄さん」

「タロウ兄さん」

読み上げたメダルをゼットライザーにセットしてブレードを動かし、スキャンさせる。

『「ULTRAMAN」「ACE」「TARO」』

後はいつも通り、Zが両手を広げて叫ぶ。

「御唱和下さい、我の名を ウルトラマンZ!」

「ウルトラマン………ゼエエエエエエエエツト!」

と叫びながらゼットライザーを掲げ、トリガーを押す。

三兄さんのウルトラマン達かが光の線を描きながら飛び、Zの元へ集約する

『ULTRAMANZ BETA —SMASH』

「ウルトラマンゼット！ベータスマッシュ！イエア！」

変身時に飛び上がり、ウルトラマンタロウやウルトラマンオーブ・バーンマイトの様な空中アクロバティックなドロップキックをお見舞いする。

レッドマンが軽く吹き飛び倒れ、こちらは綺麗に着地してから立ち上がる。

今までとは違う筋骨隆々な肉体に赤と銀のカラーリング。タロウの様なプロテクターと赤いマスク。

何の因縁か、その姿は敵対する者にそっくりだが、胸にはZの文字が刻まれている。

「ゼットファイ！」

それは真つ赤なウルトラマン達のパワーが詰まった戦士

『ウルトラマンZ ベータスマッシュ』だ

姿が変わったZを目の前にしても動じぬレッドマン。

すると、レッドマンはファイティングポーズを取り、叫ぶ  
「レッドファイター！」

両者共に宣戦布告をし、歩き出す。

やがてその距離はほぼ0と言って良い。互いに睨み合いながら額を打ち付ける。

『レッドパンチ！』

「無駄無駄無駄無駄あ！」

レッドマンは左腕を振り抜き、Zもそれに対応するように右の拳を繰り出した。

互いの拳が交差し、顔面へと叩き込まれる。

「く、クロスカウンターだど!?!」

と、王道のバトル漫画みたいな展開にミイが驚きの声を上げる。

「……………」

「クッ！」

赤い奴らは、お互いに1歩下がる。が、直後。ウルトラマンZの身体から紅蓮の光が放たれる。特に左腕の肘から先は一層強く激しく輝き、もはや炎の様であった。

「『ゼステイウムアップー!!!』」

燃え盛る剛拳を突き上げる、それが、レッドマンの頭部を捉え、レッドマンが空高く舞い上がる。

が、レッドマンの【HP】はまだ僅かに残っている。レッドマンがそのまま『レッドレーザー』を放とうとしたその時！

「『炎帝』！」

と自身の二つ名の所以たるスキル名を叫び、ミイがレッドマンに爆撃を浴びせる。



.....  
レドマンの【HP】はそこで尽き果て、光となって消えていった  
.....

## 共闘の後で

光になって消えて行く赤いアイツを見つめながら、Zは変身を解いて元の姿に戻る。

「……………」

ウルトラマンのメダルを手に取り、見つめるショウト。

するとソコへ、ラストアタックを決めたミイが話しかける

「おい、確か名は……ショウトだったな」

「貴女は……エンテイ……………」

「ミイだ。後、『炎帝』だ○ケモンの名前見たく呼ぶな」

ミイはジト目で呼び方の訂正を求める。

「おつと、すまない。窮地を救って頂いた恩人なのに礼を欠いていた」  
「いや、助けられたのはコツチだ。お前が来なかったら私達は全滅していた」

「なあに、礼には及ばないよ。俺がここに来たのはピグモンを助ける為だし」

「ピグモン……………?」

ショウトとミイが話していると、テクテクと小さな怪獣が歩み寄って来る。

「あ、ピグモン!」

ピグモンに気付いたショウトは足を曲げ、その頭を撫でる。

「なるほど。ピグモンとはそいつの事だったのか」

「ああ、友好珍獣ピグモン。これでもウルトラマンを助けたこともある優しくて勇気のある怪獣だ。大丈夫だったか?」

「キュ!キュキュ!キュキュキュッキュ?キュキュ?」

「え?ああ、俺の手の心配をしてくれてるのか?安心しろ。俺は強い

から」

シヨウトはレッドナイフで貫かれた手をグツパグツパしながら答える。

正直なところ、綺麗に穴が空いている上にズキズキとした痛みもあるため、普通にダイジョバない状態である。

―にしても、手―めちやくちや痛いな―しかもゲームで穴が空く上に血が出るって割りと凝ったボスだったな―

そうこう考えてるとピグモンはどこからともなく二枚のイベントメダルを取り出し、シヨウトに差し出す。

「これは……………俺にくれるのか?」

「キュキュー」

ピグモンはそう頷く。シヨウトはそれを肯定として捉えるが、彼は首を横に振った。

「ありがとう。でも、今回キミを助けようとしてくれたのはあの人達だから、そのメダルは受け取れ無いよ」

「いいのか?今回頑張ったのはお前なのに……………」

「ああ。さつきも言った俺が助けに来た理由はピグモンを助ける為だったから別にメダルを横取りしに来た訳じゃないし」

シヨウトは「何より」続けて言い放つ

「最終的に赤いアイツを倒したのはミイさんだ。だからこれはお前が貰ってくれ」

「そうか……………なら、お前に渡したそのメダルはそのままお前が持つていてくれ。私が見つめていても意味が無い物だが貴様なら使えるのだろうか?それに助けられた側として最低限の礼として受け取って貰いたい」

ミイがそう提案する。シヨウトにとってはとても大助かりであり、

今の所ウルトラメダルを使えるのはショウトだけである。

—正直、ここであの時の恨みを晴らしたいけど、助けられた上にみんなが周りにいるからな……ソレにわざわざ必要なアイテムを知らない相手に投げつける様な奴では無いし—

「それじゃあお言葉に甘えていただくよ。ありがとう」

とミイが考え事している間にメダルを仕舞い、お礼を言う

「礼には及ばぬ。むしろこっちが礼を言うべき所だからな」

「そっか。それじゃあ最後に……」

とショウトはピグモンの方に向い、パネルを開き

「ピグモン、思い出に1枚いい?」

「キュキュ?キュ!」

記念撮影タイムに入る

「あ、炎帝の皆さんも!」

「いや、私達は……」

「せつかくなんですからご一緒に!」

ミイは断ろうとしたが、少年の穢れなき純粋な目で訴えられたら断る事も出来ず。そのままピグモンを中心に集まり

「はい!チーズ」

こうして、炎帝とピグモンとウルオタのスペシャルショットが誕生したのだった

## 運営、掲示板、ご本人

運営の管理ルームにて

「はあ!? レッドマンがやられた!?!」

「マジか! 倒したのは誰だ! メイプルか?」

「えっと、倒したのは【炎帝の國】と………げえ! ウルトラマンZ  
じゃねえか!」

「アイツかよ! てか何で炎帝と一緒に居たんだ? アイツはメイプルと  
行動中だったろ!」

「ちよつと待ってろ映像出すから」

『レッドレーザー』

『うわあああああ!』

『きやあああああ!』

『うおおおおお!』

『ぐはあああああ!』

「ここまでレッドマン優勢だな」

「お、レッドマンがピグモンに向かってナイフを投げた!」

『……キユ?』

『無事か?』

「うっわ、ここで滑り込むのかよ! しかも素手で取るか! 普通!」

「アレって結構リアル寄りに作った気がするんだが………出きるか  
? お前」

「無理に決まってるだろ。しかも、あのまま戦闘とか普通の人間じゃ  
無理だろ」

「シヨウト普通じゃないと?」

「もしかしたら本当にウルトラマンだったりしてな」

『御唱和下さい、我の名を ウルトラマンZ!』

『ウルトラマン……………ゼエエエエエエエエエエエエエツト!』

「あ、シヨウトがZになったぞ」

「スタン系のスキルを変身の時間稼ぎ使う辺り普通じゃねえけどメイプルのカバームーヴ見た後だとあまり驚かないな」

「メイプルは異常なんだよシヨウトはどちらか言うところありふれてる  
と言うか……………まるでウルトラマンの主人公の様な進み方と言うか」

「おい、その主人公が押されてるぞ」

「お、遂にウルトラマンZ敗北か!」

『ウルトラマン!』

『ジエア?』

『これは貴様のか!?!』

『ウルトラメダル!?!なんで、それを!』

『そんな事は後で良い!で、貴様のなのか!』

『一応、な!』

『そうか。なら……………持つてけ!』

「ミイ!?!なんてもん渡してんだ!」

「おい、今のメダル何のメダルだ?」

「インナースペースにカメラを切り替える!」

『マン兄さん、エース兄さん、タロウ兄さんのメダルだ!!シヨウト!』

『真っ赤に燃える勇気の心を手に入れるんだ!!』

『おう!』

『真っ赤に燃える、勇気の花!』

『マン兄さん』

『エース兄さん』

『タロウ兄さん』

『ULTRAMAN』『ACE』『TARO』

『御唱和下さい、我の名を ウルトラマンZ!』

『ウルトラマン……………ゼエエエエエエエツト!』

「揃っちゃったよ……………」

「こういう展開嫌いじゃないけど、そうじゃないんだよな!」

「あくあんま見たくないけど、続き見ていくか」

『レッドパンチ!』

『無駄無駄無駄無駄あ!』

『く、クロスカウンターだと!?!』

「グレ○ラガ○で見たことあるぞここ!」

「おい!大技来るぞ!」

「耐えろ!耐えてくれ!」

『『ゼステイウムアッパー!!!』』

「ヨッシャアアアアアアア!耐えたぞ!アレを耐えた!」

「このまま逆転が……………」

『『炎帝』!』

「……………」

「はい、解散解散。各自、持ち場に戻るように」

---

【またウルトラマンZが現れた】

名無しの盾使い

御唱和下さい、我の名を

名無しの魔法使い

クロム

名無しの剣使い

クロム

名無しの槍使い

クロム

名無しの弓使い

クロム

名無しの斧使い

クロム

名無しの盾使い

うん。そうなんだけどそうじゃない

名無しの槍使い

ウルトラマンZの事だろう？アレなら知ってる

名無しの剣使い

むしろ、あんなん気付かない方が難しい

名無しの弓使い

見た目デツカイし、声もデツカイし、主張もでかかったからな

名無しの魔法使い

へり下ってるのかふんぞり返ってるのか分かんない感じで日本語

がヤバかった

名無しの斧使い

それより、件のウルトラマンもといショウトが一番気になる所。

名無しの剣使い

と言うと？

名無しの斧使い

アイツ、メイプルちゃん達と一緒に行動している

名無しの剣使い

は？



名無しの魔法使い

は？

名無しの弓使い

は？

名無しの剣使い

よし、殺そう

名無しの盾使い

待て待て待て！お前死ぬ気か!?

名無しの斧使い

そうだ。シヨウトが一人の時を狙って奇襲をかけたが返り討ちに

された

名無しの魔法使い

斧使いいいいいい！

名無しの弓使い

敵は取ってやるからな！

名無しの斧使い

まだ死んどらんわ！死んだけど

名無しの剣使い

どっちだよww

名無しの弓使い

とにかく、シヨウトは殺す

名無しの魔法使い

異議なし

名無しの盾使い

お前ら落ち着けて

名無しの斧使い

これを見ても落ち着けるか？

【名無しの斧使いが写真を送信しました】

名無しの剣使い

これは、ウルトラマンZと………炎帝の國!?

名無しの魔法使い

ミイいるじゃん！

名無しの斧使い

襲撃前に取った映像だ。それよりもここが問題だ。ウルトラマン Zに赤い姿が増えた。

名無しの剣使い

うっほ、良い筋肉してんじゃねえか

名無しの魔法使い

もしかしなくてもSTR重視の姿だな。ボスの攻撃耐えてる辺り

VITも高そう

名無しの弓使い

マジかよ。あんなに早い姿に攻防一体とか………鬼畜仕様かよ

名無しの斧使い

いや、それでも無いかも知れないぞ

名無しの弓使い

と言うと？

名無しの斧使い

奴は戦う時、ウルトラマンではなく普通の姿で良く戦っていた。ウ

ルトラマンになれば瞬殺なのに、だ

名無しの魔法使い

つまり、ウルトラマンになるためには条件があるって事か？

名無しの斧使い

推測だがな。これも推測だがおそらくウルトラマンになれる時間も限られていると思われる

名無しの弓使い

根拠は？

名無しの斧使い

ウルトラ決闘歴史の公式設定にウルトラマンの活動時間は約3分。通常より大きくなると活動時間は短くなるらしい。

名無しの魔法使い

なら今回のは小さくして時間を伸ばしているとかか？

名無しの斧使い

おそろくな。だから奴と戦う時は長期戦を狙うのがベストかもしれない

名無しの盾使い

それが出来たら苦労はしない

名無しの剣使い

異議なし

---

一方その頃ショウトは……………

「うっわ、結構バツクリいったわね……………」

「ショウトくん。大丈夫？痛くない？」

「普通に痛いけど、こんぐらいで騒いでたら、ウルトラマンなんて名乗れねえよ」

と言ったわいいが痛い事には代わりは無い。現に、サリーに回復かけてもらっている所だ。え？『お前回復魔法使えるじゃん』って？帰りにまた襲撃にあつてMP切れました。ポーシオンは節約です。

「で？何か収穫はあったの？」

「もちろんさあ」

俺はそう答えて戦利品を取り出す。

「おー！メダルが四枚も！」

「親切な方々が譲ってくれたんだよ」

「へー、そんな人もいるんだー」

と、メイプルは感心しているが、サリーは言葉の真意を察して、苦虫を噛み潰したような顔をしていた。

「さて、今日は疲れたから寝るわ」

「うん！見張りは任せて！」

「じゃ、おやすみ」

そう言っつてシヨウトは眠りにつき、1日目が終わっていった。